

旭川医大 病院ニュース



(編集) 旭川医科大学病院
広報誌編集委員会委員長
廣川博之

<http://www.asahikawa-med.ac.jp/>



本院のICUは、平成6年5月に集中治療部が設置されたことを受け、同部が管理する中央診療施設として、同年、現在の臨床検査・輸血部の場所に6床が設置され、平成8年度には、救急部と集中治療部との連携が開始となり、現在の救急医療体制が確立されました。

当初は、救急患者も3,000件弱と現在の半数程度であり、運用にあたっては、主に、術後患者で十分な集中管理を必要とする患者を対象としており、サージカル的な役割の濃いICUとして稼働しておりました。

その後、大規模な病院再開発が始まり、平成17年3月には現在の場所に移動し、同じく6床として稼働しておりましたが、この頃には、救急患者も5,000件を超えるとともに、救急外来及び院内臨時を含めた手術件数も5,000件以上と大幅な増加となりました。

その結果、在院日数が3日程度となり、術後に入室できない患者や入室したとしても「十分な集中管理」ができないまま当日に退室しなければならない状況が発生し、特に、一般病棟での夜間受入れによる病棟業務への負担が重く疲弊の一因となっており、解決策として、ICUの増床が課題となりました。

このようなことから、平成19年度に病院改革を目的に設置されたタスクフォース会議においてICUの増床が検討されましたが、平成21年の政権交代による「コンクリートから人へ」の公約とともに、残念ながら、増床の実現には至りませんでした。

一方、北海道では、平成22年度に厚生労働省に予算措置された「地域医療再生臨時特例交付金」を活用した「新たな地域医療再生計画」事業が策定され、この計画は、三次医療圏を対象に医療提供体制の問題を解決・整備しようとするものです。

本学は、北海道から強い要望のあったPICUを

含めたICUの増床について、整備事業計画として取り纏め・提出した結果、事業規模の縮小がありましたが承認され、長年の課題だったICUの増床が実現しました。



整備事業は、既存のICUを全面閉鎖のうえ、4床増床による10床とする改修工事で、平成24年8月から工事が始まり12月に完了しましたが、この間、代替病床として、9階東病棟のご協力により4床を準ICUとして稼働させたものの、各診療科には、大変、ご不便をお掛けしましたが、その間、ご協力いただきまして、ありがとうございました。

お陰様で、平成25年2月からは、PICUを含め10床によるICUとして新しいスタートとなりましたが、病室は、従来どおり完全個室とし、モニター等の関連機器は全て一新することで、患者に対する安全な医療を確保するとともに十分な集中管理を可能としております。

今後は、各診療科の共有施設として、術後や救急患者に留まらず、病院全体の重症患者を受入れる施設として、利用していただければと思います。

最後に、この度の整備事業にあたりまして、学長様、病院長様には、特段のご配慮をいただきましたことを、スタッフ一同、心から感謝申し上げます。



〈定年退職に際して〉

約20年間における院内の 核医学診療の変遷と想い

放射線医学講座 教授 油野 民雄



平成5年9月に旭川医科大学に赴任して以来、早いもので約20年が経過し、3月末に定年退職を迎えることになった。その間一貫して放射線診療のなかの核医学に従事してきたが、以下の2つの事項が忘れられない。

第一はRI内用療法である。赴任当初は1階の核医学検査室に隣接して病室が2床設置されていたが、甲状腺癌全摘後のI-131内用療法を目的としたものでなく、甲状腺機能亢進症のI-131内用療法のみしか実施されていなかった。当時の海野教授（耳鼻咽喉科）の要請により、甲状腺癌全摘後のI-131内用療法を実施することにしたが、施設能力の限界の故に投与量が80mCi以下に制限され、十分な治療効果が得られなかった。また、一般病床からも離れていたため、看護師確保の面で問題があり、常時実施できなかった。その後、病院の再開発の際に強くお願

いして、一般病棟内の10階東にRI治療が可能な病室を2室設置してもらい、最大投与量も150mCi可能となるよう施設を拡充してもらった。当初は年間20例前後であったが、現在では施設能力の限界に近い年間90例まで件数が増加しており、道北・道東地区における拠点病院としての使命を果たしている。

第二は平成21年7月より稼働したF-18 FDGによるPET/CT検査である。吉田学長の「大学・病院にとって必要であるから導入しよう。」との学長就任時のご英断で実現したものである。F-18 FDG PET/CTは、病期診断、悪性度、治療法の選択、再発や予後の評価などの点で、ガン診療に不可欠な検査として大いに威力を発揮し、現在、年間1,750件の検査を実施している。

核医学診療はこのような変遷を遂げたが、診療実績も赴任当初の年間約2億円から、昨年度の約3億9千万円（RI内用療法5千万円含）へと大幅な増加を示した。核医学診療に従事する医師は現在の3.5人から4月以降には2人に減少し、マン・パワー不足が危惧されるが、何とか現在の診療実績を維持し、各診療科の期待に応じて欲しいと願っている。

松野病院長が 北海道科学技術賞を受賞しました

この度松野病院長が永年行ってきた「日本人に適合する人工股関節の開発」の功績が認められ、北海道科学技術賞を受賞されました。

この賞は、北海道が、科学技術上の優れた発明、研究等を行い、北海道産業の振興、道民生活の向上など経済社会の発展振興等に功績のあった方に、知事表彰として、北海道科学技術賞を贈呈しているもので、昭和35年度以来毎年行われており、平成23年度までに、139名、17団体が表彰され、最近では平成22年度に、本学の吉田晃敏学長が受賞されています。

松野病院長は股関節外科医として豊富な臨床経験を持ち、多数の人工股関節置換術を行って来られました。その中で、使用される人工股関節製品は外国製品が大半を占め、欧米人と体格が異なる日本人に

は適合が難しく、10～15年で再手術となる例が少なくなかったため、より日本人の骨格に適合し、ゆるまず、耐久性、臨床成績にも優れた新しい人工股関節の必要性を感じ、国内の人工関節のメーカーと共にハイブリッド型人工股関節「4-Uシステム」を開発されました。

この4-Uシステムは今では全国で1,500例以上に使用され、術後5年以上の中期成績は極めて良好で、患者さんの身体機能の長期維持に多大な貢献をされております。

また、平成19年度からは文部科学省の橋渡し研究支援プログラムのシーズ「ゆるむ事のない人工関節開発へのブレークスルー」の橋渡し研究のプロジェクト責任者として、より新しい人工股関節の開発を進めており、病院長は「今後も、より患者さんの身体的、経済的負担が軽くなるような人工股関節を開発していきたい」とプロジェクトへの期待を込めておられます。

[小児科 & 4 階西病棟]

プレイルームの拡張によせて

—子供たちが子供らしく過ごせる時間と空間を大切に—

4 階西病棟看護師長 外川 恵子

入院を余儀なくされた小児やその家族のために病棟が念願としていた「プレイルーム」の拡張工事が平成24年12月末から始まり、杉本病棟医長を中心としてプロジェクトXのように施設課・経営企画課・病棟保育士と協力して、平成25年1月末に暖かい日差しにあふれた明るいプレイルームが完成しました。



▲Before

▼After



子供たちが本来必要な諸機能の発達を保障し入院中にも「生活」や「遊び」を提供することは、小児科病棟にとって最も大切にしていることです。

「プレイルーム」は家族的で子供たちが自然でいられる空間であり、学習やくつろぎを提供し複数のグループの自然な居合わせを誘発し社会性を育む空間でもあります。

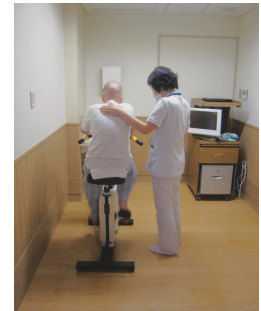
このたびの拡張によって**3つの素敵なこと**がもたらされたのでご紹介します。

1つ目は「プレイルーム」の壁に病院長・看護部長のご尽力によりイラストレーター小林香弦里さん作の壁画をいただいたことです。木のぬくもりに作品の可愛い動物たちがマッチし**Heart Tree**はこども達の輝く笑顔をひきだして心を育む場にこれからずっと寄り添ってくれるでしょう。

2つ目は施設基準を満たしたことで、管理料が算定され保育士の2名体制が実現できることとなります。今後は周産母子センターとも連携して、さらに患児や家族の療養環境の充実をはかり小児の医療と看護の質向上に努めたいと思います。

3つ目は患児や付き添いの家族へゆったりと安全にリハビリやリラクゼーションを提供できるようにとエアロバイクを設置できるスペースを設けたことです。設置直後から日々利用していただき母兄から好評が得られています。

小木田病棟保育士からは「ワー !! 広い。早く遊びたい。」と完成を心待ちにしていた子供たちや家族に入院生活の不安や苦痛を少しでも和らげる「楽しみ」「遊び」を今まで以上に提供したいと抱負が述べられました。また狭い「プレイルーム」でも多くの季節行事や本の読み聞かせを支援してくださった近江さんはじめボランティアの皆様には心から感謝を申し上げます。これからも子供たちが子供らしく過ごせる時間と空間をチームで大切にしていきたいと思ひます。

**地域がん診療連携拠点病院
研修会を開催しました**

がん診療相談支援センター 相談員・看護師 鎌 仲 知 美

国は全国どこでも質の高いがん医療を提供することを目指し、がん診療連携拠点病院（以下「拠点病院」）を全ての2次医療圏に原則1つを目指して整備してきましたが、都市部に拠点病院が集中することも多く、全国には113の空白医療圏が存在します。

道北では当院の他に旭川厚生病院、市立旭川病院が拠点病院として指定を受けており、3病院と医師会を含めた連絡協議会で医療圏を分担し、医療従事者や市民に向けてセミナーや講演会を企画しています。

今回は去る1月24日に市立稚内病院を会場に宗谷地区の医療従事者を対象に研修会を開催しました。内容は、拠点病院のがん治療が終了後、地元のかかりつけ医と拠点病院で連携し診療する「地域がん診療連携クリティカルパス」、化学療法における好中球減少症に焦点を当てた「支持療法」、終末期に起こりやすい症状の一つである呼吸困難のお話「症状緩和」の3つのテーマで当院の医師が講演しました。セミナーには市立稚内病院の医師、看護師をはじめ、保健所職員、近隣のクリニックの職員など58名の参加がありました。

研修会の企画にあたり地域の医師会や病院にご協力頂き、希望の多いテーマを開催していますが、過去の研修会でも緩和ケアに関する希望が多く、終末期医療への関心が高い事がわかります。

少し前までのがん診療では、患者さんは都市部の拠点病院に入院したままで、地元に戻る患者さんは治療の方が圧倒的でした。しかしこれからは拠点病院と地域の病院が連携しがん診療を継続するという姿に変わりつつあります。ただし治療していない場合、地元に戻って何かあった時大丈夫なのか、患者側は不安があると思ひます。そこで地元でも心配が少なくがん治療を継続出来るよう、手術や化学療法の他に緩和ケアチームや相談支援センター、患者サロン等を整備した準拠点病院の準備が空白医療圏で進んでいます。

また院内で毎月開催している医療者対象のがんに関するセミナーを今年度から名寄、士別、富良野、稚内、遠軽の病院に中継し、各病院との質疑応答が可能になりました。今後も地域のがん診療に関わるスタッフのニーズに応えながら最新の情報を発信し、患者さんが住み慣れた土地で安心して生活出来るよう地域との連携がより一層重要になると思ひます。



ロシア ユジノ・サハリンスク市からの 院内視察について

平成25年1月24日（木）にユジノ・サハリンスク市（ロシア）から医師2名が、本院の視察に訪れました。

前回（平成23年）と同じく、旭川市と友好都市を提携するユジノ・サハリンスク市との医療交流の一環で行われたもので、副病院長・平田教授の案内で、手術室など実際の治療現場を視察し、集中治療部長・藤田教授から2月1日稼働予定である新ICUの説明を受けました。



視察された2名の医師は、今後の医療活動に役立てたいと感謝の言葉を述べておられました。



日本クリニクラウン協会から グッズの寄贈がありました

当院の小児科病棟（4階西病棟）に年2回来訪している「クリニクラウン」が所属する日本クリニクラウン協会と、婦人靴・鞆のメーカーであるダイアナ株式会社のコラボレーションによる「クリニクラウン訪問先病院への寄贈プロジェクト2012」において、寄贈先の病院として当院が選ばれ、4階西病棟に入院している子供たちと、子供たちを支えているお母さんたちへのプレゼントとしてオリジナルグッズの寄贈を受けました。

寄贈されたのは、ハローキティ・DIANAコラボオリジナルノベルティグッズで、ハローキティのイラストとDIANAのロゴが入ったハンカチが3種類とオリジナルショッパーの合計240点のグッズが贈られてきました。

これからこのグッズを小児科病棟に入院している子供たちやお母さんへお渡ししていこうと思っています。

ます。

当院では年2回クリニクラウンに訪問いただいておりますが、今後もこの活動は継続していく予定です。

また、クリニクラウン協会による訪問活動は、現在、道内の医療機関では当院のみとなっていますが、来年度より、北海道とのコラボレーションによる訪問病院の拡大計画があるようです。

今後訪問する医療機関が増え、クリニクラウンが道内のより多くの入院中の子供たちや、子供たちを支える親御さんたちに笑顔をプレゼントしてくれるのではないのでしょうか。



【薬剤部】

副作用情報 (61)

デノスマブ(ランマーク皮下注120mg)による
重篤な低Ca血症について

2012年4月に発売された多発性骨髄腫及び固形癌に対する骨病変治療薬デノスマブにおいて、同年9月に重篤な低Ca血症についての安全性速報(ブルーレター)が発出された。2012年4月17日～2012年8月31日までの間に重篤な低Ca血症の副作用が32例報告され、そのうち死亡原因との関連が完全に否定できないとされた例が2例報告されている。

デノスマブは、特異的かつ高い親和性でヒトRANKL(破骨細胞分化因子)に結合するヒト型IgG2モノクローナル抗体である。多発性骨髄腫及び骨転移を有する固形癌の骨病変における破骨細胞の活性化を抑制することで骨吸収を抑制し、骨折や疼痛等の骨関連事象の発現リスクを低下させる。

デノスマブ投与中に発現する低Ca血症は、治療開始後数日からあらわれる事があり、頻回に血清Ca等の電解質濃度を測定する必要がある。特に、腎機能低下患者は、Caの尿からの再吸収及び胃腸

管での吸収機能が低下している事に加え、ビタミンDの活性化が障害されているため低Ca血症が発現する可能性が高い。

低Ca血症の発現を軽減するため、血清補正Ca値^{*}が高値でない限り、毎日少なくともCaとして500mg及び天然型ビタミンDとして400IUの摂取(健康食品・一般用医薬品等)を実施する様推奨されている。ただし、腎機能低下患者に関してはビタミンDの活性化が障害されているため、活性型ビタミンDを使用するとともに、Caについては投与の必要性を判断し、適宜投与量を調節する事が重要である。

また、低Ca血症が認められた場合は、Ca及びビタミンD製剤の経口投与に加え、緊急を要する場合は、Caの点滴投与を併用する等、適切な処置を速やかに実施する必要がある。

(薬品情報室 谷川 知美)

※補正Ca値(mg/dL)= 血清Ca値(mg/dL)+4

−血清アルブミン値(g/dL)

(低アルブミン血症の患者では、みかけ上のCa値が低値になるため、血清アルブミンが4.0g/dL未満の場合、上記の式により補正した値を用いる)

【輸血部門発】

不規則抗体保有カード

輸血・細胞療法部門では、平成25年1月から不規則抗体が検出された患者様を対象に「不規則抗体保有カード」の配布を開始しました。

不規則抗体は、輸血や妊娠などによって他人の赤血球が体内に入り、免疫されて作られます。不規則抗体と反応する血液を輸血すると、DHTR(遅発性溶血性反応)が起こります。また、妊娠時には母親の不規則抗体が胎児の赤血球と反応し、HDN(新生児溶血性疾患)を起こす場合があります。これらでは死亡例の報告もあるため、不規則抗体の検出はとても重要です。不規則抗体は一度検出されても時間とともに減弱し検出できないことがあります。抗体が減弱しても抗体と反応する血液を輸血すると、免疫反応が起こります。これはワクチンと同じメカニズムです。当院では、一度不規則抗体が検出された場合は患者情報に登録されるため、抗体が検出できな

くなった場合でも輸血の際は常に適合血を出庫しています。しかし、患者様が別の医療機関を受診した場合、不規則抗体検査を行っても抗体陽性にならない場合があります。この際は前記の有害反応が発生することがあります。

「不規則抗体保有カード」は、表には患者様の保有する抗体名、輸血の適合率、裏には医療従事者に対する注意などが記載してあります。このカードを所持することで当院以外の医療機関でも不規則抗体情報を共有でき、安全な輸血が行えます。また、常に所持できるよう、保険証や診療券と一緒に持ち運べるサイズになっています。不規則抗体が検出された場合には当部門の臨床検査技師が患者様に直接、不規則抗体やカードの意義などについて説明します。その際は、外来、病棟スタッフの皆様にご協力いただくこともありますので、よろしく願い致します。

(輸血・細胞療法 山内 紫織)

不規則抗体保有カード	
氏名	旭川 花子 殿
生年月日	昭和4年3月21日
血液型	B型 Rh(D)陽性
保有不規則抗体:抗Fya	
輸血可能な血液の適合率は日本人約1%です	
検査日:平成25年〇〇月〇〇日	
医療機関受診の際に医師又は看護師に提示して下さい	
旭川医科大学病院ID: 999-999-9	
医療機関の方へ	
この患者さんは不規則抗体を保有しています。赤血球製剤を輸血する場合は、抗体と反応しないO型輸血血を選択する必要があります。また、この不規則抗体は胎盤通過性を有し、血液型不適合妊娠により新生児溶血性疾患を起こす可能性があります。貴施設で赤血球製剤を輸血する場合は、新たな抗体産生の有無などを再度、確認をお願い致します。	
何か不明な点がございましたら下記までご連絡ください。	
旭川医科大学病院 臨床検査・輸血部 輸血・細胞療法部門 Tel.0166-69-3381	

病院ボランティア近江さん「奨励賞受賞」

個人の部

個人の部は、個人の活動や同じ趣意を持つ個人同士の集まりが「こころを育む活動」の原点であるという観点から、個人による活動を応援するものです。個人賞は、総合的に審査し、最も優れた活動1件に対し、奨励賞は、さらなる発展と広がる可能性を持った活動に対し贈られるものです。

近江 敦子
TEL 090-1384-1118 E-mail anko1217@hotmail.com

活動テーマ 小児病棟での絵本読み聞かせ

活動内容 総合病棟の小児入院病棟に出向き、絵本の読み聞かせを行っています。月2回、病棟のプレイルームで読み聞かせを行うほか、病院で行われる行事の際には、付き添っている大人も一緒に楽しめるよう季節に合わせて紙芝居を添えたり、行事に参加できない子どもの病室で読むなどの活動を行っています。希望する子どもに絵本の貸し出しを始めると、子どもたちのための工夫を怠りながら、5年間活動を続けています。

審査結果

子どもたちが楽しみにしている絵本が何冊も、心あたると喜びます。今後の継続、発展に期待します。

この度、平成20年より小児科病棟でボランティア活動されている近江敦子さんが2012年度「子どもたちのこころを育む活動」の個人の部奨励賞を受賞されました。

これはパナソニック教育財団が事務局を務める「こころを育む総合フォーラム」で子どものための活動についての優れた事例について表彰されるもので、今年度は14団体2個人が表彰されました。

近江さんは現在、月2回小児科病棟プレイルームで絵本の読み聞かせの活動をしています。またクリスマスなどの行事の際は病棟保育士と一緒に、音楽

や紙芝居をしたり、プレイルームまで来られない子のために病室を廻って絵本を読まれています。

近江さんよりコメントをいただいております。「大の病院嫌いだった父が、柿崎教授、看護師長の柴田さんはじめ皆さまのお蔭で、穏やかな入院生活を送れる事になった5年前、お返しをしたいと思います。窓口の医療支援課の方々、また活動現場では看護師長の外川さん、前師長の澤田さん、病棟保育士の小木田さんはじめ病棟の皆さまに温かく支えられて活動を続けてきました。

これからも入院中の子どもたちと付き添いの方に、ホッとした時間をお届けできるように続けていきたいと思っております。」



平成24年度 患者数等統計

(経営企画課)

区分	外来患者延数	一日平均外来患者数	院外処方箋発行率	初診患者数	紹介率	入院患者延数	一日平均入院患者数	稼働率	前年度稼働率	平均在院日数(一般病床)
	人	人	%	人	%	人	人	%	%	日
10月	34,963	1,589.2	92.81	1,627	65.83	15,855	511.5	84.96	84.28	13.56
11月	32,799	1,561.9	92.97	1,432	66.83	15,419	514.0	85.38	88.76	13.39
12月	30,894	1,626.0	92.49	1,313	65.73	15,466	498.9	82.87	84.71	13.70
計	98,656	1,591.2	92.76	4,372	66.13	46,740	508.0	84.39	85.34	13.55
累計	292,623	1,564.8	91.96	13,987	64.72	142,517	518.2	86.09	85.34	13.94
同規模医科大学平均	210,011	1,127.5	88.12	13,647	65.01	139,237	506.3	84.35	84.57	15.50

編集後記

先日、経営企画部・経営企画課の引っ越しがありました。入退院センター機能拡充により、これまでの所が入退院センターとなります。移転先は、SPDセンターや保育所の奥にある共通棟1階と2階、およびローソン開業前にあった売店跡地(旧売店)です。経営企画部長室、経営戦略担当副部長室が共通棟1階、病院情報担当副部長室、看護師長室が共通棟2階、経営企画課課長、病院庶務係、病院法務係、経営管理係が共通棟2階、経営企画部事務、経営企画課課長補佐、病院情報係、診療情報係が旧売店にあります。それぞれが大変離れていますので、経営企画部、経営企画課にご用のある方は、行き先をご確認の上、お訪ね下さい。病院情報管理システムの利用手続きなどは、旧売店です。また、打ち合わせがあると、運動になります。部課

内の打ち合わせでWEB会議システムが利用できないか考えています。

編集後記が引っ越しの話になってしまいました。春が待ち遠しいです。(経営企画部・廣川博之)

時事ニュース

News

- ・1月15日(火)…精神科病院実地指導の受審
- ・2月1日(金)…新ICU稼働開始
- ・2月20日(水)…第2回脳死下臓器提供シミュレーションの実施
- ・3月2日(土)…地域がん診療連携拠点病院市民公開講座開催
- ・3月25日(月)…学位記授与式